マーヴェルの「庭」と17世紀の庭（後編）*

吉　中　孝　志

【キーワード】アンドリュー・マーヴェル、「庭」、17世紀、果実、メロン栽培

17世紀の後半になるとメロン周辺の温度を上げて保つために、市販の専用メロン・グラスが使われるようになった。例えば、イーヴリンの Sayes Court の庭には1686年に50のメロン・グラスがあったことがわかっている。[64] 当初は、そして引き続き、通常のグラスを用いる庭師も多くいただろう。『フランスの庭師』では、

> When your *plants* begin to peep you shall cover them with pretty large *Drinking-Glasses*, leaving a little passage for the *Ayr* 'twixt the *Glasse* and the *Earth*, least otherwise, they suffocate and *tarnish*.[65]
>
> 植物が顔を出し始めたら、かなり大きなグラスで覆う。ただ、窒息して駄目にならないようにグラスと土の間を空気が少し通る隙間を開けておく。

という指示がある。北国のリードの場合はさらに保温に気を使っている。温床を使いつつ、マットをグラスと併用している。

> ... setting drinking Glasses on them at first and cover on the matts over the whole carefully, to preserve from Snow, Rains and Winds; taking off the matts in temperate dayes but keep on the Glasses, except in a warme space; that you acquaint them a little with the Air, by raising the edg of the Glasses, with a little Straw on the laun side, closing it at night again.[66]
>
> まず、メロンの上にグラスを置いて、そして雪、雨、風から保護するために全体をマットで注意深く覆う。温暖な日にはマットを剥がすが、暖かい季節以外はグラスをそのままにしておく。芝生の側で小さな藁を使ってグラスの縁を持ち上げ、植物を少し空気に慣れさせ、夜は再び閉じること。

リードが次のページで指示しているように、メロンが生長して、より大きなグラスが必要になってくるとベル・グラスが用いられる（‘as they grow larger, cover with the Bell-Glasses’）。*OED* の初例は1882年で、のちに cloche という言葉も用いられるようになるが、園芸植物の、取っ手の付いた促成用釣鐘形のガラスの覆いのことである。1629年までには使われ始めており、厚い緑色のガラスで製造され、あまり光を通さず動かすのにも重かったようである。[67] ミーガーは、『イギリスの庭師』の中で、板ガラスの使用も奨めている。

> ... for their bed, do use a frame of Glass, as it were divers panes, so handsomely fitted, that they may take up all or some as occasion requires, without any trouble; also a frame Arched over, to set on and take off as occasion serves, for the more easie and convenient opening, and taking off their Glasses[.][68]

> メロン畑のために、ガラスの枠形器具を使え。何の苦労もなく、その時々に必要なように全体を、もしくは部分を持ち上げられるように、非常にうまくはめ込まれているいわば、様々な板ガラスである。もっと容易に、便利にガラスを開いたりはずしたりするために、機会がありしだい、つけたりはずしたりするアーチ型に覆いかぶさる枠形の器具もある。

いわゆる冷床（cold frame）を作ろうとしているのだと考えてよいだろう。ミーガーはその労を容易なものと言っているが、こういったガラスやグラスは、空気を入れるためや適温に保つために、傾けたり、取り外したりする必要があり、庭師は、密閉空間の地面に指を当てて温度をみたり、水蒸気の曇りに注意を払ったりする必要があった。

さらに、膨らんできたメロンの実は、タイルの上に置かれた。

> You must place a *Tyle* under every *Melon*, the better to fashion them, and advance their *maturity* by the reflection of the *Sun* from it[.][69]

> より良い形にするために、そして日光の反射によって熟成を促進するために、一つひとつのメロンの下にタイルを敷かなければならない。

北であれ南であれ、温度管理のために壁の近くに植えられたり、覆いを被せられたり、グラスやガラスに覆われて栽培されていたメロンのことを考えると、立ち入ることを制限されたはずのメロン畑でその匍匐茎につまずくことは逆に難しかったに違いない。実際にマーヴェルの「庭」の話者が「つまずく」としてもメロンを載せたタイルにつまずく、というほうが現実の17世紀の庭

での描写に近かったかもしれない。ましてやトマス・アンドリュー・ナイトがイギリスのメロン栽培に関して19世紀初めに発表した論考に記されているように、「メロンの広がった枝は、特にガラスの下では、細くて弱い」（'... the extended branches of the Melon plant, particularly under glass, are slender and feeble'）のだとすれば、[70] マーヴェルの「庭」の話者は、自分がつまずいて転ぶよりは、メロンの枝を容易にぶち切ってしまった可能性の方が現実味を帯びていると言えるだろう。

林檎、葡萄、ネクタリン、そして桃は、スポンテ・スア（suponte sua）の修辞技巧に沿って、自らが動き、話者を官能的に誘惑するように描かれている。[71] メロンもまた、果物のイメージが祖型的に喚起するエロティシズムを伝えようとしているのだろうか。[72] しかし、さらに他の果物とは違って、メロンだけはひとりでに動くことなく、話者が自分からつまずいている。結局のところマーヴェルの「庭」の話者が「メロンにつまずく」のも観念的に考えたほうが、説明がつきやすい。例えば、ウリ科植物の典型的な効能は熱を冷ますことで、Thomas Hill は、cucumbers を敷いた寝床が子どもの高熱を吸い取ってくれると書いているが、[73] その冷却作用は肉体的な熱のみならず精神的な熱にも作用すると考えられていたようである。William Langham は、ウリ科植物の薬としての使用例として「取り除かれるべき情欲」（'Lust to void'）への効能を指摘し、「ウリは、性欲を駆逐し、血を薄める」（'Gourds drive away Venus, and ingender thinne blood'）と教えている。[74] ジェラードの『本草誌』は、メロンの薬効の項で「病気に効くその他の効果よりもむしろ情欲の猛威を抑えるために、ふつうイタリア人やスペイン人によって食されている」（'a Melon: which is vsually eaten of the Italians and Spaniards rather to represse the rage of lust, than for any other Physicall virtue.'）と記し、[75] Thomas Hill は、国民性に限定されることなく、メロンに関して

> The greater number of Physitians writes, that those eater, doth mitigate the venereal act, and do abate the genital seed.[76]
>
> メロンを食べる者は、性行為を減じ、実際、精子を弱める、と多くの医者たちが書いている。

と述べていることを考えると、1651年に再版されたヒルの『庭師の迷路』やジェラードの広めたメロンの薬効に関する一般知識をマーヴェルが利用した可能性はないだろうか。「庭」では、このメロンの持つ治癒効果は、「我々が激情の熱に駆り立てられたとき、／愛は、ここを最も良い避難所とする」（'When we have run our passions' heat, / Love hither makes his best retreat', lines 25-26）という話者の主張とも整合性を持ってくる。そして、まさにその場所で、アポロやパン、

そして「自分たちの [激情の] 炎と同じように残酷な、愚かな恋人たち」（‘Fond lovers, cruel as their flame’, line 19）を茶化したはずの話者が、一種の樹木性愛に捕らわれているさまを、女性への情欲を癒すはずのメロンに、逆につまずいて転んでしまうという表現が暗示しているというふうに考えることもできるのではないだろうか。

かつて川崎寿彦が指摘したように、マーヴェルの「庭」の中では、「庭が『囲われて』いるという特別の表現は見つからない。」そして「その一つの理由は、この庭の中では人工の原理が意識されていない…からであろう。」[77] このことは、今まで我々が、マーヴェルの「庭」を殊更17世紀の庭と比べながら考察しようとしてきた過程からも明らかである。不思議なことに、マーヴェルの「庭」の「巧みな庭師」（‘skilful gard’ner’, line 65）は、特にメロン畑のように囲いが必要な場合でさえも、「庭を責める草刈人」が言うように、「まず四角い庭の中に／死んで澱んだ空気の溜りを囲い込んだ」（‘He first enclosed within the gardens square / A dead and standing pool of air’, lines 5-6）わけではなさそうなのである。さらに「庭」には、同じ草刈人が言うような「吐き気を催させる土」（‘ a ... luscious [= sickly, cloying, *OED* a. 2] earth’, line 7）、つまり堆肥で作られた温床を暗示する表現など何処にもない。 この ‘skilful’ は、*OED* のその意味での用例は15世紀半ばで終わっているが、‘rational’ の意味なのだろうか。それとも「庭」の話者は、自分を「巧みな庭師」と区別しようとしているのか。つまりは自分が庭師ではないから庭の中の人工の原理を意識しないでいられるということなのかもしれない。トピアリーのような緑の彫刻も、水力仕掛けの鳥も、「庭」の話者は意識しない。ローマの近郊フラスカーティのヴィッラ・アルドブランディーニでマーヴェル自身が見たかもしれないような（Smith, p. 159）、「巧みな庭師」が作った「花と香草で作った、この新しい日時計」（‘Of flow’rs and herbs this dial new’, line 66）でさえも、詩的な解釈をすれば、時間ごとに、季節ごとに咲き、香る、秩序だった庭全体の比喩表現であり、必ずしも人為や人工は必要ない。先に我々がスミスの注に従って「噴水」と解釈した49行目の ‘fountain’ も自然に湧き出す「泉」でいい。そのときには「巧みな庭師」とは万物の創造主である神の比喩ともなるのだ。そしてその場合には、マーヴェルの「庭」の中にトピアリーも鳥の噴水もなかったように、日時計も、庭師の存在でさえも自然の中に消えていく。[78]

マーヴェルの「庭」の話者が、自分を「巧みな庭師」と峻別していることは、前者に労働の原理が意識されていないことでも示されていると言えるかもしれない。『新しい果樹園と庭園』の中でローソンが次のように言うとき、彼は、マーヴェルの「庭」の話者と同じような、庭師の労働の成果を享受するだけの人々について語っているようである。

> ... whither do they withdraw themselves from the troublesome affairs of their estate, being tired with the hearing and judging of litigious Controversies? choked（as it were）with the close ayres of their sumptuous buildings, their stomacks cloyed with variety of Banquets, their

ears filled and overburthened with tedidious［sic］discoursings? whither? but into their Orchards?

彼らは、訴訟上の紛争を聞いたり裁定したりすることで疲れ果て、彼らの財産に関わる厄介な業務から離れて何処へ身を退けるだろうか？彼らの豪勢な建物のむっとする空気で（いわば）窒息して、お腹は、様々なごちそうで堪能し、耳は、退屈な議論で一杯、過剰負担状態のときに、何処へ？彼らの果樹園しかないのでは？

しかしローソンは、このような「癒しのための」庭園思想だけでなく、そういった庭が存在するための労働原理を忘れていない。彼は同書の冒頭で、はっきりと「庭師が、怠惰な、もしくは無精な不器用者であったことはない」（'The Gardner had not need be an idle, or lazie Lubber[.]'）こと、「庭師の仕事は終わりがない」（'his labours ... are endless[.]'）ことを主張し、「絶えずなすべきことがあり、夏の収穫の時期が来れば、その果実を摘むにも自分の手で行わなければならない」（'There will ever be some thing to doe. ... Now begin Summer Fruits to ripe, and crave your hand to pull them'）と言っている。[79] ここで思い出さなければならないことは、先に比較したマーヴェルの「私が送っているこれは、なんと素晴らしい生活か！」とローソンの「これはなんという喜びであろうか？」との間には、果樹園での耽溺という共通点はあっても、後者のそれは、すべての実りが「自らの手で行った仕事」の結果であるという決定的な差異である。マーヴェルの「庭」では、果実たちが自ら、何もしない話者に近づき、その美味な果汁を話者の口に注ぎ込んでいた。そのいわば無為の状態とは違って、スピードもまた『エデンを出たアダム』の冒頭で、読者に宛てて、

God *himself*, ... *chose out that employment* [i.e. *the art of* Husbandry] *for the best of the Creatures*, Man, *whom he placed in* Eden, *not only to* enjoy, *but to* labour, *without both which no place can be* a Paradise.[80]

神御自身が、被創造物の中で最も良いものであるひとのために、その仕事［即ち、耕作の技］を選び出された。ひとを神は、ただ楽しむためだけではなく労働するためにエデンに置かれた。その両方がなければ、どの場所も楽園にはなりえないからである。

と書いた。この清教徒的な労働意識は、予測できる通り、ミルトンの『失楽園』（John Milton, 1608-74, *Paradise Lost*, 1667）でも表されている。[81] 聖書では、神は人をエデンの園に置き、「これを耕させ、これを守らせられた」（創世記第２章第15節）のであるが、ミルトンのアダムとエ

バは、土地を耕作するのではなく、天使からその道具までもらって庭仕事をするかのように描かれている。アダムは次のように言う。

> While other animals unactive range,
> And of their doings God takes no account.
> To morrow ere fresh morning streak the east
> With first approach of light, we must be risen,
> And at our pleasant labour, to reform
> Yon flowery arbours, yonder alleys green,
> Our walk at noon, with branches overgrown,
> That mock our scant manuring, and require
> More hands than ours to lop their wanton growth:
> Those blossoms also, and those dropping gums,
> That lie bestrewn unsightly and unsmooth,
> Ask riddance, if we mean to tread with ease[.]
>
> (*Paradise Lost*, Book 4, lines 621-632)[82]

ミルトンは、エデンの園に咲く花々を「花壇や凝った飾り結び式装飾での見事な園芸技術ではなく、恵み深い自然が／丘や谷や平原におびただしく注ぎだした、／まさに楽園にふさわしい花々」('Flowers worthy of Paradise which not nice art / In beds and curious knots, but nature boon / Poured forth profuse on hill and dale and plain', Book 4, lines 241-243）と描いているから、庭園史の観点からは、王党派に好まれてきた飾り結び式花壇（knot garden）に代表されるような整形式庭園が、17世紀後半になって自然風庭園の方向に向かい、18世紀に盛んになるイギリス式風景庭園を先取りしているという解釈も成り立つだろう。しかし、それよりもさらに重要と思われることは、ミルトンが、彼の庭の描写において、おそらく自らの政治意識を反映して、ホッブズ（Thomas Hobbes, 1588-1679）のように自然状態を嫌い、「剪定／改革」('reform'）しようとしていることだ。[83]

ミルトンのエデンの園が、あくまで人手を、剪定を必要としているということは、そこでは自然が他者として客体化され、統御の対象となっているということである。それに引き換え、マーヴェルの「庭」の話者は、自然を他者と見なしているようには思えない。むしろそこでは自己と他者が交わり同化している。[84]

> [The mind creates]

Far other worlds, and other seas;
Annihilating all that's made
To a green thought in a green shade.

（lines 46-48）

マーヴェルの時代の庭は、社会経済史的なレベルで考えると、パラドクシカルではあるが、17世紀英国の急速な、特にクロムウェル政権下では「西方政策」（Western Design）のような、帝国主義的海外拡張主義と表裏一体の側面を持っていた。ウォラー（Edmund Waller, 1606-87）がクロムウェルに捧げた詩の中で描いたように、イギリスは、果物を含めた「稀なるものはすべて、海から貢物として」受け取り（'[Our little world has] all that's rare, as tribute from the waves'）、「我が国の土や空が与えてくれないものは／我らの常に忠実な友である海が供給してくれる」（'what our earth, and what our heaven, denies, / Our ever constant friend, the sea, supplies'）ことを願った時代であった。[85] その「遥かな別世界、そして別の海」への拡大志向は、マーヴェルの「庭」では、皮肉にも詩人が庭という小世界の中へ、さらに精神世界へと退行することによって表現されている。「庭」の構成要素である、メロンに代表されるエキゾティックな果物は、別の海を越えて貿易によってもたらされたものでも別の世界から移植されたものでもなく、むしろ精神の作り出した別世界の産物なのだ。当然ながら、マーヴェルの言う「作られたあらゆるもの」の中には、我々が17世紀の庭の中で見てきた彫像も、トピアリーも、噴水も、水力仕掛けの鳥も、温床とメロン・グラスで栽培されたメロンも全てが含まれるだろう。詩人の想像力が創り上げた「庭」の中で、その話者の意識は、たとえ実際に存在していたものでさえも消滅させてしまう。ならば、桃太郎の生まれ出た桃の大きさを測定しようとする試みと同じように、想像力の世界において実証主義は無力にならざるを得ない。そしてこのことを我々は初めからわかっていたはずなのだ。

＊　この論文は、2011年12月17日、大阪 YMCA にて開催された十七世紀英文学会関西支部第185回例会で「マーヴェルの「庭」と17世紀の庭（拡大版）」として口頭発表した原稿に加筆したものの一部である。

注

64. John Evelyn, *Directions for the Gardiner and Other Horticultural Advice*, ed. Maggie Campbell-Culver (Oxford: OUP, 2009) p. 227.
65. Nicolas de Bonnefons, trans. John Evelyn, *The French Gardiner*, p. 143.

66. Reid, *The Scots Gard'ner*, p. 95.
67. Evelyn, *Directions*, p. 230 を参照。
68. Meager, *The English Gardener*, p. 197.
69. Nicolas de Bonnefons, trans. John Evelyn, *The French Gardiner*, p. 146. See also Plat, *The Garden of Eden*, p. 64: 'Lay your young mellons upon ridge-tiles, to keep them from the ground, and for reflection.'
70. Knight, 'A concise View', pp. 221-222.
71. スポンテ・スアと「庭」の果実のイメージについては、Yoshinaka, *Marvell's Ambivalence*, pp. 110-111 を参照。
72. Terry Riggs（October 1997）は、オランダで発展し17世紀に人気のあったジャンルに属する絵画の一つである、Sir Nathaniel Bacon による 'Cookmaid with Still Life of Vegetables and Fruit'（c. 1620-5, Tate Britain, 図版 5 参照）を評して、熟れたメロンが料理女中の豊満な胸の谷間の曲線を反復するように描かれていることから、その主題はエロティックな暗示的意味を持っていただろう（'The subject would most likely have had erotic connotations. The abundance of ripe melons surrounding the cookmaid echo her voluptuous cleavage'）としている。http://www.tate.org.uk/art/artworks/bacon-cookmaid-with-still-life-of-vegetables-and-fruit-t06995/text-summary, 9 August 2014.
73. Thomas Hill, *The gardeners labyrinth*, The Second Part, p. 131: 'But the same is more marvelous which in the Greek instructions of husbandry is noted, and of many hath been proved, that if an Infant being sick of the Ague, and suckying still of the breast be laied on the bed made of the Cucumbers to sleepe, being framed of like length to the Child, and that he sleepeth on the bed but a little time or a nap, he shall immediately be delivered of the same, for which he sleepeth, all the feverous heat passeth in the Cucumbers.'
74. William Langham, *The Garden of Health Containing the Sundry Rare and Hidden Vertues and Properties of All Kinds of Simples and Plants* (1597; London, 1633), p. 294.
75. Gerarde, *The Herball*, p. 918. Robert Lovell, *Pambotanologia* (Oxford, 1659), p. 297 にも同様の記述（'The Spaniards and Italians eate them to refresh the rage of lust.'）がある。
76. Thomas Hill, *The gardeners labyrinth*, The Second Part, p. 147.
77. 川崎寿彦、『マーヴェルの庭』（東京：研究社、1974年）、114頁。
78. こういうマーヴェルの庭は、結局のところ、それがサー・ニコラス・ベイコン（Sir Nicholas Bacon）のゴーハンベリー（Gorhambury）の庭のように、「エピキュロス派の庭」ではなく、「ストア派の庭」の系譜に属するということでもあるだろう。Cf. '... his gardens were devoid of amusing hydraulics, cunning conceits, heraldic devices, knots, statuary and symbolic topiary.

Emphatically they were not designed to entertain' (Hassell Smith, 'The Gardens of Sir Nicholas and Sir Francis Bacon: An Enigma Resolved and a Mind Explored', in *Religion, Culture and Society in Early Modern England: Essays in Honour of Patrick Collinson*, ed. Anthony Fletcher and Peter Roberts [Cambridge: CUP, 1994], p. 151). しかし、一方でマーヴェルの庭には、「ストア派の庭」が称揚する、*Laborare est orare* をモットーとするような、庭仕事がもたらす精神的喜びや美徳についての要素は読み取れない。この点に関してのマーヴェルの「庭」の話者とマーヴェル自身のセクシュアリティーとの関係については、吉中孝志、「庭のセクシュアリティー―マーヴェルは、なぜ耕さないのか？―」（近刊）を参照。

79. Lawson, *A new orchard, and garden*, pp. 69, 2.　1599年にエディンバラで出版された詩集の中でスコットランドの自然を描きながら、Alexander Hume（c. 1556-1609）は、夏の朝早く小鳥たちの次に起きだして小麦と葡萄を見に行く勤勉な農夫に言及している（'Up braids the carefull [i.e. painstaking, watchful] husbandman, / His cornes, and vines to see[.]'）。*The Penguin Book of Renaissance Verse 1509-1659*, selected by David Norbrook, edited by H. R. Woudhuysen (Harmondsworth: Penguin, 1993), p. 403, lines 41-42 を参照せよ。Jennifer Munroe, *Gender and the Garden in Early Modern English Literature*, p. 25 は、庭の所有者、職業庭師、庭整備のための雇われ人夫の三者をはっきりと区別した最初の例がローソンの『新しい果樹園』の中に見出されることを指摘している。庭は、働かなくてよい所有者が自分の雇っている庭師たちや労働者たちが働く様子を眺めて楽しむ場所、換言すれば一種の階級維持装置としても機能する。例えば、ルイ14世の家庭菜園をベルサイユ宮殿の庭に作った庭師 Jean de La Quintinye は、館から見えるキッチン・ガーデンの心地よさの一つの要因に「庭師たちの絶え間ない活動」（'the perpetual Action of the Gard'ners', *The Compleat Gard'ner*, trans. John Evelyn [London, 1693], vol. 1, p. 36）をあげている。同様に、17世紀半ばに作られた日本の修学院離宮の回遊式庭園にも田畑が組み込まれているが、働く農夫たちを眺めることが皇族にとって一種の楽しみを提供していたに違いない。

80. Speed, *Adam out of Eden,* 'To the Reader'.

81. 庭に対するこの「清教徒的な労働意識」は、清教徒に限られたものではない。たとえば、王党派ジョン・イーヴリンは、*Kalendarium Hortense*（1664）の 'Introduction' で 'we dare boldly pronounce it, there is not amongst Men a more laborious life than is that *of a good* Gard'ners'（Evelyn, *Directions*, p. 3）と述べている。しかし、エデンの園での労働は、やはり清教徒的と言えるのかもしれない。イーヴリン自身が、同書の冒頭で、'Paradise ... was *no longer* Paradise, than the Man was put into it, to dress it and to keep it'（*ibid.*）と述べるとき、パラダイスには人の手が必要ではなかったことを示唆している。

82. John Milton, *Paradise Lost*, ed. Alastair Fowler (Harlow: Longman, 1986), p. 231.

83. Amy L. Tigner, *Literature and the Renaissance Garden from Elizabeth I to Charles II: England's Paradise*, p. 19 は、'Imagining the biblical time that predates agriculture, Milton's epic depicts Eden as distinctly agricultural, a garden that needs human stewardship.' と述べた後で、ミルトンの庭を Walter Blith のような同時代の土地改良論者や Gerrard Winstanley のような清教徒、共和主義者の根本方針と実践に重ねている。

84. マーヴェルの庭での自然に対する能動的な人為は、時に注意を要する行為とみなされている。例えば、'The Coronet' の話者のように「あらゆる庭、あらゆる牧場を通って／花を集める」（'Through every garden, every mead, / I gather flow'rs', lines 5-6）ようなことをすれば、「古の蛇を見つける」（'I find the serpent old', line 13）ことになり、'The Picture of Little T. C. in a prospect of Flowers' では、蕾を摘み取らない（'spare the buds', line 35）ようにしなければ、花の神フローラを怒らせることになってしまう。マーヴェルのメロンの持つ政治的含意については、Takashi Yoshinaka, 'Marvell's Melons', in *Hiroshima Studies in English Language and Literature*, 58 (2014), p. 9 を見よ。

85. Edmund Waller, 'A Panegyric to My Lord Protector, or the Present Greatness, and Joint Interest, of His Highness, and This Nation', lines 52, 55-56, in *The Poems of Edmund Waller*, ed. G. Thorn Drury (New York: Greenwood Press, 1968), p. 140.　Amy L. Tigner, *Literature and the Renaissance Garden from Elizabeth I to Charles II: England's Paradise* は、当時の植物園が萌芽期植民地主義志向の実演であったことを指摘している。'Collecting and exhibiting the marvels of various horticultural species in the university and privately owned botanical gardens became a demonstration of burgeoning colonial aspirations; to cultivate and to naturalize the plants of the world was a way of dominating and owning the world itself' (p. 18).

図版５：‘Cookmaid with Still Life of Vegetables and Fruit’, Sir Nathaniel Bacon, c. 1620-5, © Tate Britain [2014]

Marvell's Gardens in the Seventeenth Century (Part III)

Takashi YOSHINAKA

We all know that literary tradition has often associated the imagery of fruits in general with sexuality, but scholars and annotators so far have not noted that Marvell's reference to melons in 'The Garden' might be deeply bound up with the properties of cucurbitaceae.

One of the typical properties, especially the medicinal ones, of cucurbitaceae is to bring down a fever. And it seems to have been believed that this kind of cooling effect was gained not only physically but also mentally. Under the section of 'The Physicke commodities of the Pompons and Mellons' in *The Gardener's Labyrinth*, Thomas Hill explains this medicinal virtue: 'The greater number of Physitians writes, that those eaten, doth mitigate the venereall act, and do abate the genitall seed'. It is highly probable that this kind of knowledge was available through Gerard's immensely popular herbal to the readers of Marvell's 'The Garden', or that his 'habit of incorporating influences in his poems from recently published printed volumes' urged him to allude to Hill's explanation of melons in the 1651 edition of *The Gardener's Labyrinth*. In 'The Garden', this healing property of melons fits in very nicely with the speaker's claim that 'When we have run our passions' heat, / Love hither makes his best retreat' (lines 25-26). Marvell's intended meaning might be ─ or at least the reader who knew this particular property of melons could detect ─ the irony embedded in the description of the speaker 'stumbling on melons'. He has just ridiculed 'Fond lovers, cruel as their flame' (line 19), but he himself, unaware of his own different kind of infatuation, falls in love with 'this lovely green' (line 18). By showing that this dendrophile has lost his footing and got carried away by the passion's heat, which melons were supposed to cool down, and perhaps by partly laughing at himself, Marvell cannot but suggest the ridiculous aspect of the garden-mania which another of his poems, 'The Mower against Gardens', thematises.

The last section of this paper, by drawing attention to the fact that the speaker in 'The Garden' does not perform gardening labours, argues that Marvell's gardens, after all, are created in the mind and reaffirms the limits on the part of literary scholars of positivism in analyzing a work of art.